

第7章

鳥取県内の生徒にとっての学習塾産業とのかかわり

小山田 建太

【ポイント】

- 生徒の通塾率は高校間で大きく異なっており、Wave1 から Wave3 にかけて通塾率が一貫して増加する高校と、通塾率が一貫して低い水準に留まる高校とに分化していた。
- 「塾の先生」に対する信頼や、自身の進路選択に際して「塾の先生の話」を「参考に使っている」程度に係る割合は、通塾率が高い高校の生徒にとっていづれも高かった。
- 他方で、全ての高校の生徒にとって、「高校の担任・副担任の先生」に対する信頼および、「学校の先生の話」を「参考に使っている」程度に係る割合は、それぞれ一貫して非常に高いものとなっていた。ゆえに学習塾産業に対する生徒の信頼や期待とは、学校や教師に比して一般には大きくない。

1. 学習塾産業に着目することの重要性

地方の高校教育では一般に、高校ならびに教師がその生徒たちに大きな影響力を持つことがこれまで広く論じられてきた（吉川 2019）。またこのような影響力が生じる理由の1つには、学習塾を始めとする学校外教育の機会が少ないという地方の環境的要因が示唆されている。この点について有海（2011）は、周囲に学習塾などの教育機会が多くあり、教師の影響力が相対的に乏しい中央都市部の生徒の特徴と比較して、「入学した学校の教師との間に信頼関係が形成され」、その「教師によって強調される『社会的な自己実現』といった志向性が、学習・進学意欲に作用している」という地方の生徒の特徴を明らかにしている（有海 2011: 199）。加えて鳥取県内に関していえば、2012年度に廃止された専攻科¹⁾の存在も県内の学習塾産業の影響を抑制するものであったといえる（平木 2008; 北川・諸岡 2016）。

しかしながら今日においては、鳥取県内の生徒たちにとっても学習塾産業の影響が大きくなっていることを想定する必要がある。その理由としては、第1に専攻科の廃止があり、第2に高校生による通塾率の全国的な増加が挙げられる。例えば太田（2016）は、1990年から2015年にかけて高校生の通塾率が増加していることや、特に2000年代以降は高偏差値帯の高校において通塾率の増加が顕著である実態を報告している。すなわち今日の鳥取県内の生徒たちは、学校や教師のみならず学習塾産業とも一定程度のかかわりを維持するようになってきているということが推測される。重ねて前述の通り、学校や教師の影響力が学校外教育機会の多寡に起因するという示唆を受ければ、彼らの通塾などの実態を詳らかにすることが今後の高校教育の在り方を検討するにあたって重要な視座を提供するものとなると考えられる。

そこで本稿では、今日の鳥取県内の生徒たちが学習塾産業といかなるかかわりを有しているかについて明らかにするべく、彼らの通塾率（第3節）や「塾の先生」に対する信頼（第4節）、自身の進路選択に際して「塾の先生の話」を「参考にしている」程度（第5節）についてそれぞれ確認していく。またこうした学習塾産業とのかかわりを学校や教師とのかかわりと比較するために、「高校の担任・副担任の先生」に対する信頼（第4節）や「学校の先生の話」を「参考にしている」程度（第5節）についても併せて参照する。そしてこれらの分析の際には、高校間での実態の差異が生じることを仮定し（太田 2016）、高校別での結果を提示していく。

2. 分析データ

上記の問題関心から本稿では、Wave1～Wave3の全てに回答し、かつ通っている高校が3時点を通じて同一であった生徒を分析の対象と据える（したがって転校や退学などのケースは今回の分析からは除外される）。またこの手続きによって抽出された生徒数は、各高校で90人以上となった。

3. 通塾率

ここから、上記データを用いた分析結果を提示していきたい。始めに高校別の通塾率の推移を示すのが、以下の表7-1および図7-1である。なお以降の図では各高校の推移を可能な限り詳細に記述すべく、軸の値の範囲を最大値と最小値に応じてそれぞれ設定していることに留意されたい。

表7-1 通塾率の推移 (%)

	W1	W2	W3
A高校	25.0%	26.3%	35.8%
B高校	39.4%	43.7%	57.3%
C高校	17.2%	18.6%	28.8%
D高校	36.0%	44.6%	50.0%
E高校	14.6%	10.1%	16.7%
F高校	23.1%	20.6%	20.1%
G高校	67.0%	73.9%	75.5%
H高校	40.6%	43.9%	43.1%

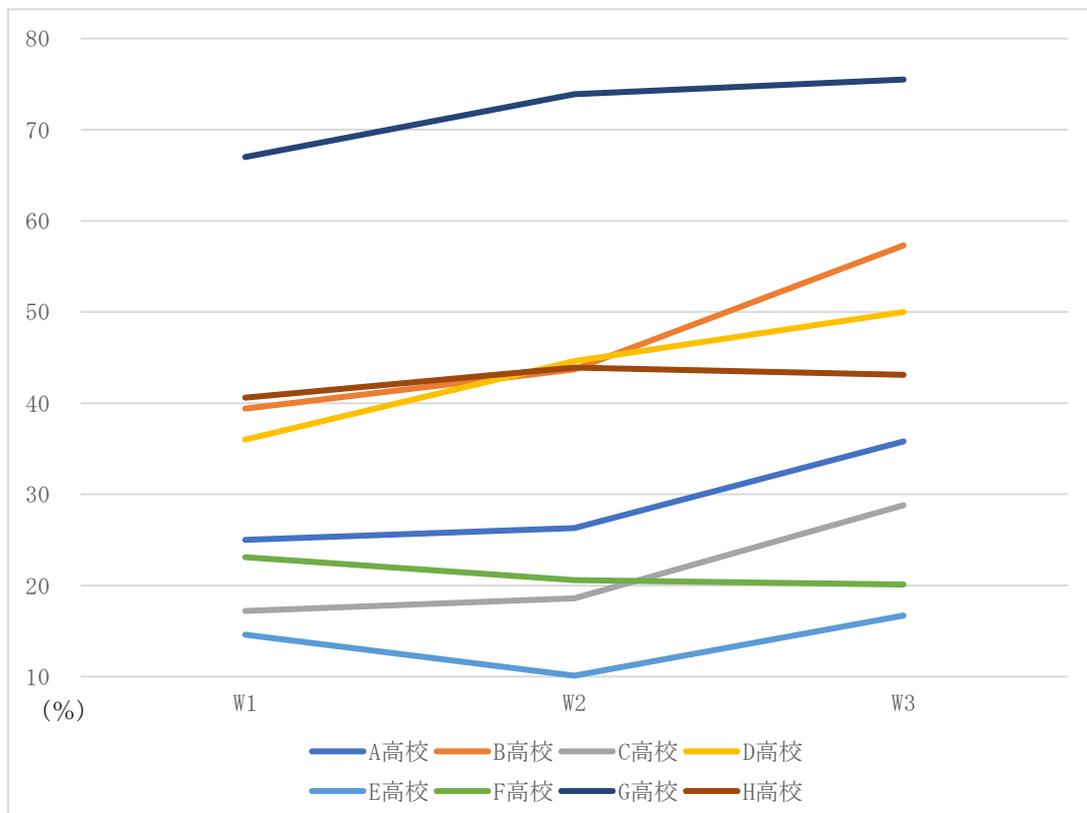


図7-1 通塾率の推移 (%)

上記の図表より、その通塾率は高校間で大きく異なるものとなっていることが確認できる。また通塾率が一貫して最も高いのはG高校であり、対して一貫して最も低いのはE高校であるが、Wave3での両者の通塾率のポイント差は58.8(75.5-16.7)となっており、県内進学校間においても一定程度の差が開いていることが分かる。加えて、通塾率が高い高校(B高校・D高校・G高校)ではWave1からWave3にかけてその割合が一貫して増加する傾向が見られるが、他方で通塾率が低い高校(E高校・F高校)ではWave1からWave2にかけてその割合が減少する傾向が見られる。なおF高校は、Wave1からWave3にかけてその割合が唯一減少する高校となっている。

4. 「塾の先生」や「高校の担任・副担任の先生」に対する信頼

それでは次に、生徒たちは「塾の先生」をどの程度信頼しているのだろうか。そこで「塾の先生」を信頼していると回答する生徒の割合の推移を示しているのが、以下の表7-2・図7-2である。

そして下記の図表より、「塾の先生」への信頼の割合の推移とはその通塾率におおむね関連していることが読み取れる。すなわち通塾率が高い高校(B高校・D高校・G高校)ではWave1からWave3にかけてその割合が増加しており、特にWave3では非常に高い値を示している。他方で通塾率が相対的に低いC高校・E高校・F高校では、その割合が低水準のままに留まるか、もしくは減少している。

なおこのような「塾の先生」に対する信頼と比較して、「高校の担任・副担任の先生」に対する信頼がどのように推移するかについても、表7-3・図7-3から併せて確認しておきたい。

表7-2 「塾の先生」への信頼の推移(%)

	W1	W2	W3
A高校	23.2%	30.2%	28.4%
B高校	25.1%	35.9%	44.9%
C高校	16.7%	17.4%	21.5%
D高校	32.4%	35.3%	39.1%
E高校	19.1%	22.2%	14.6%
F高校	22.4%	20.5%	20.5%
G高校	48.3%	43.3%	56.3%
H高校	27.2%	29.8%	32.9%

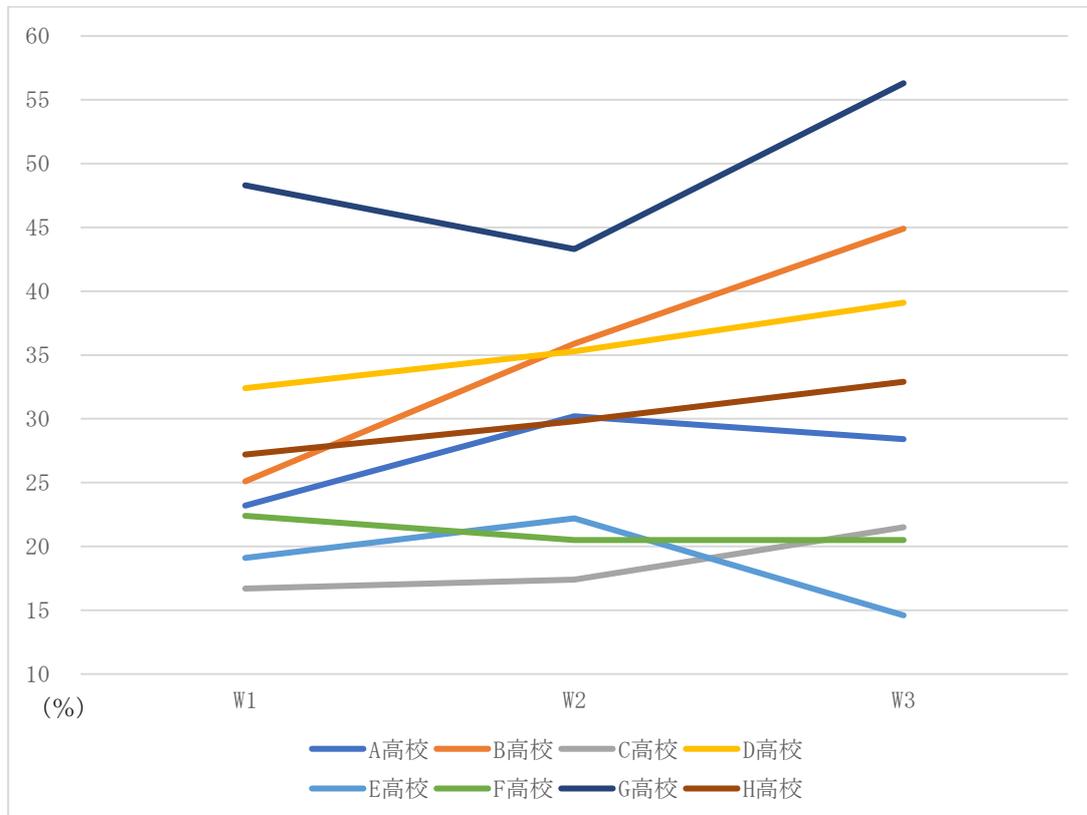


図7-2 「塾の先生」への信頼の推移 (%)

表7-3 「高校の担任・副担任の先生」への信頼の推移 (%)

	W1	W2	W3
A高校	47.4%	63.5%	70.5%
B高校	48.2%	64.6%	70.2%
C高校	58.3%	59.0%	61.8%
D高校	56.1%	61.9%	71.7%
E高校	36.0%	60.0%	59.6%
F高校	37.3%	53.8%	44.7%
G高校	63.8%	55.7%	62.1%
H高校	46.2%	58.4%	67.1%

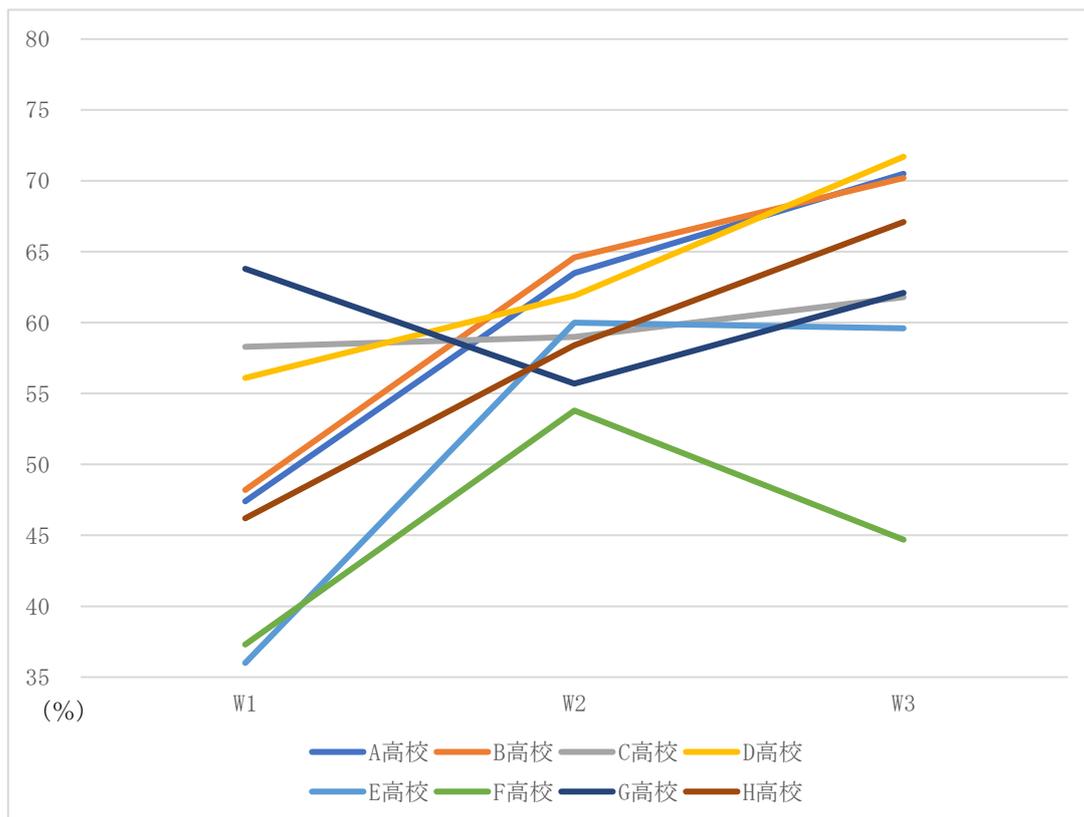


図7—3 「高校の担任・副担任の先生」への信頼の推移 (%)

これらの図表からまず読み取れるのは、「高校の担任・副担任の先生」に対する信頼とは前掲の「塾の先生」に対する信頼より有意に高いということである。ただしその上で、通塾率が高い高校（B高校・D高校・G高校）において「高校の担任・副担任の先生」を信頼する割合が相対的に高いことは興味深い。この結果より、これらの高校の生徒たちが学習塾産業に加え学校や教師をともに信頼する傾向にあると捉えることができる。

5. 「塾の先生の話」や「学校の先生の話」を「参考にしている」程度

それでは、生徒たちは自身の進路を決めるときに「塾の先生の話」をどの程度「参考にしている」のだろうか。そこで以下の表7—4・図7—4では、「塾の先生の話」を「とても参考にしている」「やや参考にしている」と回答する生徒の割合を学校別に提示する。

下記の図表より「塾の先生の話」を「参考にしている」割合の推移についても、通塾率との関連がおおむね認められる。すなわち通塾率が高い高校（B高校・D高校・G高校）では、Wave1 から Wave3 にかけて「塾の先生の話」を「参考にしている」割合が増加する傾向が見られ、その回答水準も高い。またこれに対してA高校・C高校・F高校・H高校では、Wave1 から Wave3 にかけてその割合が減少する傾向が見られる。これらより、「塾の先生の話」が彼らの進路選択に与える影響とは高校間において異なり、特に通塾率が高い高校の生徒にとって強いということが理解される。

表7—4 「塾の先生の話」を「参考にしている」割合の推移（％）

	W1	W2	W3
A高校	65.6%	52.8%	53.8%
B高校	63.0%	62.2%	68.8%
C高校	58.4%	51.1%	55.7%
D高校	64.4%	63.8%	68.5%
E高校	55.7%	58.8%	59.0%
F高校	63.0%	51.6%	48.0%
G高校	76.8%	74.9%	80.3%
H高校	68.2%	65.8%	66.4%

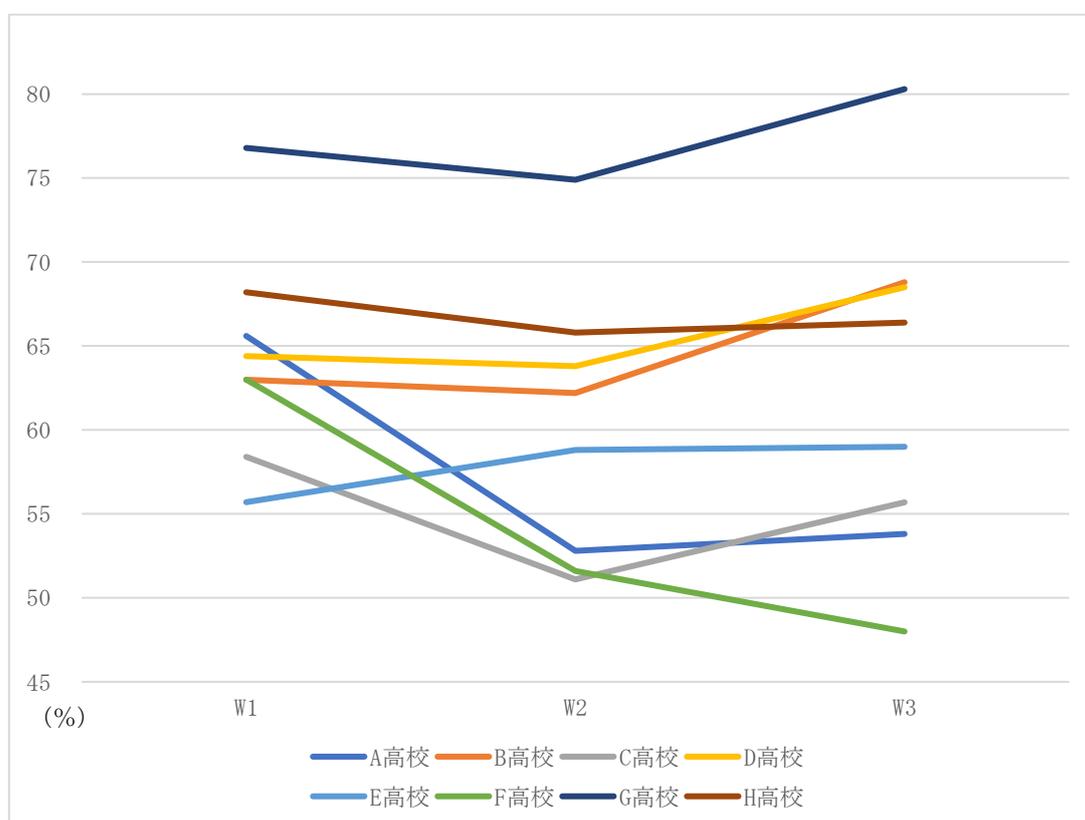


図7—4 「塾の先生の話」を「参考にしている」割合の推移（％）

重ねてこのような分析結果を、「学校の先生の話」に係る分析結果と比較させたい。その結果は、下記の表7—5・図7—5の通りである。

表 7—5 「学校の先生の話」を「参考にしている」割合の推移（％）

	W1	W2	W3
A高校	95.8%	97.9%	97.9%
B高校	90.9%	94.0%	93.9%
C高校	93.8%	97.2%	94.4%
D高校	95.7%	95.7%	95.6%
E高校	90.0%	95.5%	98.9%
F高校	92.4%	94.0%	93.1%
G高校	94.2%	96.6%	93.2%
H高校	95.6%	98.7%	99.4%

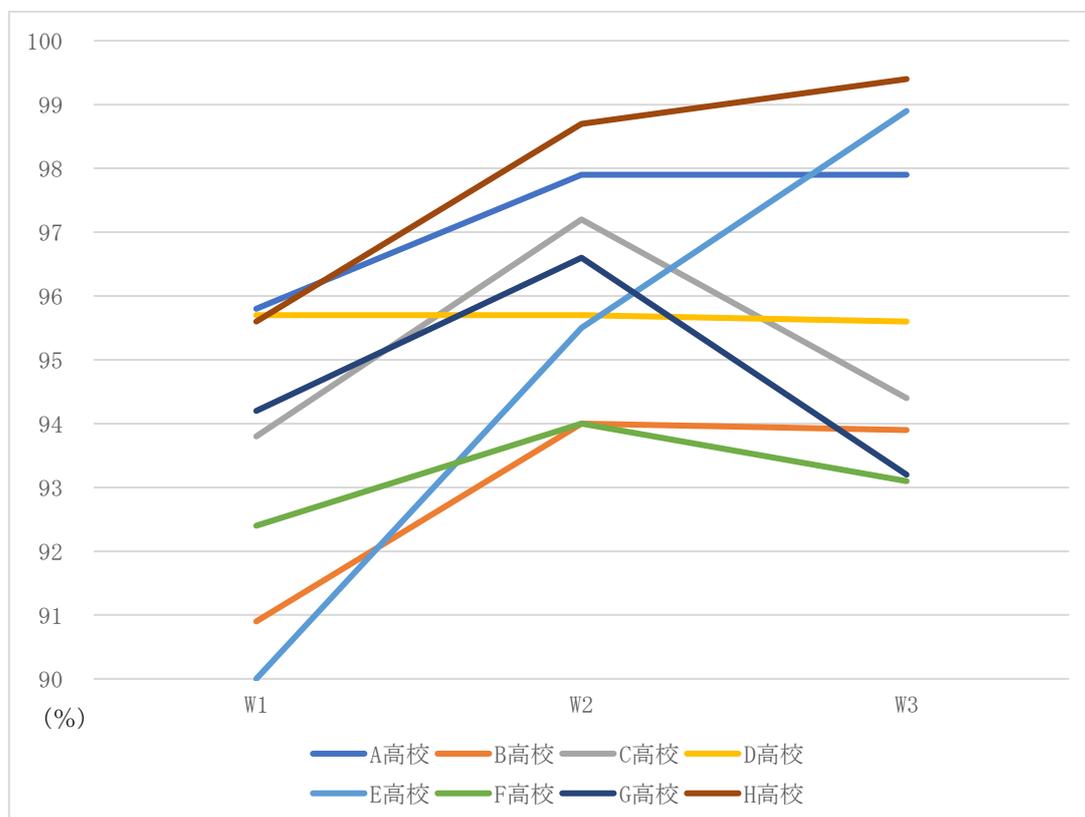


図 7—5 「学校の先生の話」を「参考にしている」割合の推移（％）

そして上記の図表から、「学校の先生の話」を「参考にしている」各高校の生徒の割合がいずれの時点でも 90%を超えており、前掲の結果に比してもその割合が明確に高いことが分かる。すなわち彼らにとっての「学校の先生の話」を「参考にしている」程度とは、「塾の先生の話」を「参考にしている」程度によらず一貫して高いものとなっている。

6. まとめ

前節までの分析結果をまとめたい。始めに通塾率は県内進学校間でも大きく異なっており、G高校を始めとして通塾率が一貫して増加する高校と、E高校を始めとして通塾率が一貫して低い水準に留まる高校とに分化するようになっていた。また「塾の先生」に対する信頼や、自身の進路選択に際して「塾の先生の話」を「参考になっている」程度に係る割合は、通塾率が高い高校の生徒にとっていずれも高かった。他方で全ての高校の生徒にとって、「高校の担任・副担任の先生」に対する信頼および「学校の先生の話」を「参考になっている」程度に係る割合はそれぞれ一貫して非常に高いものとなっていた。以上を総括すれば、通塾率の高い高校の生徒たちにとっては学習塾産業が信頼され、彼らの進路選択に際するインフォーマントとして期待されるようになってきている実態が見られるものの、学校や教師に対してはより大きな信頼や期待が一般に寄せられているということが理解できた。

最後に上記の知見にもとづきながら、今後の分析課題を述べておきたい。本稿では、生徒たちにとっての学習塾産業に対する信頼や期待が学校や教師に比して一般に大きくないことを確認したが、他方で一部の高校の生徒を中心として学習塾産業とのかかわりが増大しつつあることも把握できる。とりわけ顕著な傾向を示すのはG高校の生徒であり、彼らは通塾率が他校の生徒に比較して有意に高く（第3節）、Wave1からWave3にかけて学習塾産業への準拠を強めている（第4・5節）。加えて学校や教師に対する彼らの信頼や期待は高水準ではあるものの、Wave1からWave3にかけては微減しており、これが学習塾産業に対する意識の推移とは相反するものとなっている（第4・5節）。このように、学習塾産業への準拠を相対的に強めている高校の生徒は確かに存在し、またこうした生徒は自身の進路選択に際して両者のインフォーマントを参照していく可能性が高い。したがって今後は、学習塾産業への準拠を相対的に強める生徒たちがいかなる進路選択を実際に実現していくか、また彼らの進路選択にいかなるインフォーマントの影響が関連するかなどについて明らかにすることを目指す。

[注記]

1) この専攻科とは、浪人生の教育支援のために県教育委員会が県立高校に附設した学科である。

[文献]

有海拓巳, 2011, 「地方／中央都市部の進学校生徒の学習・進学意欲——学習環境と達成動機の質的差異に着目して」『教育社会学研究』88: 185-205.

平木耕平, 2008, 「公立高校専攻科・補習科からみた〈地方からの大学進学〉」『教育社会学研究』83: 107-127.

吉川徹, 2019, 『[新装版] 学歴社会のローカル・トラック——地方からの大学進学』大阪大学出版会.

北川翼・諸岡了介, 2016, 「地方における浪人生——補習科と地域間格差」『島根大学教育学部紀要』50:
141-152.

太田昌志, 2016, 「学校外の学習機会」『「第5回学習基本調査」報告書 [2015]』ベネッセ教育総合研究所,
113-124.